

温かな言葉で明るい社会に

浮金小学校6年 藤井 嵩大

「あ、また中学生が自殺したの。こんなニュースを見ているのは辛いよね。」と母が言った。中学校で教えている母はニュースに敏感に反応する。そんな母の言葉を聞き、僕もいつしか真剣にみてしまう。最近のニュースを見ていて、特に中学生の自殺のニュースには僕も母と同じようにやりきれない気持ちになつてしまふのだ。

なぜ、このように、自分の命を絶つ中学生が増えているのだろうか。その原因を探ると、「死んでみたら。」とか「超っさい、消えろ。」と友達に言われていたという事実が浮かびあがって来る。僕がこんなことを言われたら心がズタズタになつてしまい、学校に登校できない状態になるだろう。自殺したこの生徒と同じクラスの人は、このような言葉を彼に投げかけたら、相手がどんなに傷つくかとか、本当に死んでしまふだろうと

か、考えていたのだろうか。僕には、考えて言ったこととは思えない。きつと、軽い気持ちで、言ってしまったのだろう。他の人も言っているから、自分も言つていいと思つてしまつたのではないだろうか。みんなで言うことで無責任な行動がとれることになつてしまふのだろう。

僕のクラスでもこんな深刻な会話で聞くことがしばしばある。テストの後のことだ。ある男子が、「お前、こんなに問題数があるのに、正解が少なかったな。」とテストを見ながら言つた。言われた方は、「ああ、確かに。できなかつたよ。」と、話していた。その目は悲しそうだった。言つた方はもちろん悪意はなく、意図的に傷つける言葉を発したわけではない。そう思うと、なにげなくかわしている言葉は実に重いものではないかと感じてしまふ。考

えてみると、『っさい』『消えろ』『じゃまだ』『ばか』こんな言葉が簡単に友達と言ひ合ひその言葉が相手に与える影響などにまで考えていない。友達だから許されるのではとか、冗談だからまあいいかという気持ちがあるように思える。悲しい気持ちに陥る相手の気持ちまで想像できないのかもしれない。

しかし、こんなこともあつた。小学校最後の運動会。僕はすごく張り切つていた。絶対一位をとるぞと張り切つて臨んだ二百メートル走、そこで思いもよらないことが起こつてしまつた。第二コーナーを曲がつたところで僕は友達とぶつかり転倒してしまつたのだ。すぐ起き上がつて走らなければとあせつたが右手が痛くて走れない。そんな僕の姿を見ていて、友達が駆け寄つてきてくれ、「どうしたんだ。だいじょうぶかい。」と声をかけてくれた。トラックからテントまで運ばれる時に次々と友達や見ていた人に「だいじょうぶ。」と声をかけてもらった。僕は手はすごく痛かつたが、心がなんと

なく温かくなるのを感じた。

僕の母はよく「言葉は両刃の剣だ」と言つていたのを思い出した。運動会の時、僕は転倒して悔しい思いをしたが、みんなの言葉に励まされ、痛みも和らいだ。心配してくれた友達の気持ちが言葉を通して僕を励ましてくれたのだ。なにげなくかけてもらった言葉が心をほつとさせてくれる、そんな言葉が僕の周りには実にたくさんあることに気付いた。

例えば、僕たちが登校する時、見守り隊のおじいさん達がいっしょに登校してくれている。雨の日も、雪の日もどんなに天候が悪くてもいっしょに集合場所から学校まで歩いてくれる。「だいじょうぶか、元気に勉強するんだぞ。」そんな言葉で僕たちを励ましてくれる。「今日は疲れたな。行きたくない。」と思つても見守り隊の方の言葉が僕たちの背中を押してくれるのだ。

「死ね、ばか」と言われ、自ら命を絶つた人もいる。「お前なんか邪魔。」と言われ本当にいなくなった人もいる。人

を殺さないにしても一言で傷つけてしまうこともあるのだ。その反面、僕が運動会の時、友達の言葉で痛みが和らぎ、勇気づけられたり、見守り隊の方の言葉で元気づけられたりすることもあるのだ。

同じ言葉でも、どんな言葉を相手にかけるかによつて、受ける側の気持ちがまったく違ってくるのだ。母がよくいう「言葉は両刃の剣」という意味がようやく分かつた気がする。つまり、人を励ますのも喜ばせるのも、活かすのも言葉、そして人の心に傷をつけるのも言葉なのだ。簡単に口にする言葉にはすごい力があることを改めて思い知らされた。一人一人が言葉の持つ力を考えて、さらに相手の気持ちも考え話すことがギスギスした社会ではなくなり、互いに思いやりを持つことができらるだろう。僕も他の人が温かな気持ちになれるように言葉かけができる人になりたい。それが、僕が明るい社会を作っていくための一員になることだと今、強く感じている。